

児童文化科学館のあり方検討状況について

1. 児童文化科学館の位置づけ

児童文化科学館は、本館が昭和57年、別館が昭和43年、プラネタリウムのある天文館が昭和45年に建設されており、施設・設備の老朽化が進んでいる。

北九州市公共施設マネジメント実行計画（平成28年2月）では、「児童文化科学館は、プラネタリウムを併設する市内唯一の施設であり、今後も継続して運営していく必要があります。館のあり方を幅広く検討していきます。」としている。

このような状況を踏まえ、整備の方向性や立地場所について検討を進めてきた。

2. 整備の方向性

(1) テーマ

～ 科学や技術への興味・関心を高め、
北九州市の未来を担う人材を育む、
賑わいを創出する科学館 ～

(2) コンセプト

- ① 誰もが科学に興味を持つきっかけづくり
- ② 技術系人材の育成
- ③ 北九州の技術の発信
- ④ 周辺施設と連携したにぎわいづくり、集客力アップ

(3) 対象者

- ① 子どもを中心とする全世代
- ② 近隣他府県からの修学旅行
- ③ 観光客

(4) 機能

- ① 教育普及機能（科学に対する親しみの醸成、人材育成）
 - ⇒ 学校ではできない工作や実験の体験
 - ⇒ 企業や大学との連携によるワークショップの開催、サイエンスショー など
- ② 展示機能（科学の面白さを体感、企業との連携）
 - ⇒ 原理・原則を体感できる展示と最先端の科学技術をバランスよく展示
 - ⇒ 企業の持っている最先端の技術を発信
- ③ プラネタリウム機能（美しい映像、多目的に活用）
 - ⇒ 天文学習を通じての科学への興味のきっかけづくり
 - ⇒ 多目的な活用によるにぎわいづくり

3. 立地場所について

- 現地（桃園公園）、小倉都心部、東田地区の3地区について、次の観点から比較検討を行った。その結果、東田地区が最も適していると考えられるため、東田地区を立地場所として位置づけたい。
 - －交通アクセス（公共交通、自動車）
 - －他施設との連携（類似文教施設、その他施設）
 - －整備形態に関する制約や地域の将来性など

<東田地区>

徒歩圏内に JR 駅があるなど、公共交通の利便性が高い。

また、高速道路へのアクセスもよく、自家用車や大型バスの駐車スペースも確保できる。

近隣の「いのちのたび博物館」「イノベーションギャラリー」などの公共施設や商業施設とも、将来にわたって相乗効果が期待できる。

<現地（桃園公園）>

長年市民に親しまれ、科学館のある地区としてのイメージは定着しているものの、交通アクセスの利便性に乏しく、近隣施設との連携の可能性が見込みづらいことから、新科学館の立地としては課題がある。

<小倉都心部>

都市の中心部でかつ文化観光の要所として将来にわたり交流人口が増加するエリアであるため、集客上は有利なエリアであるが、用地や駐車スペース等の土地確保の課題がある。